CO闘争、法廷に

治ゆ認定を取り消せ

東京地裁へ行政訴訟

三池労組は去る六月二十五日の中央委員会決定にもとづき、七月一日東京地裁へ治ゆ認定取消しの行政訴訟をおこした。

CO患者のとりあつかいについては、昭和四十一年十月で労災補償が一方的に打ち切られて以来、審査請求（福岡労災保険審査官）再審査請求（労働保険審査会）と不服申立をつづけ、他方CO特別立法制定要求や対会社要求などを「解雇制限、前収補償、完全治療」の三大要求をかかげ闘ってきた。

しかし、本年四月、五月にわたって再審査請求が却下されたことによって、ついに最後まで争った六十三名を代表して桑原覚さん、川口時雄さん、浦田譲二さんの三名を原告として今回の却下をとり消すようにという行政訴訟にふみ切ったものである。（くわしくは次号参照）

今後とも治療必要

訴状はつぎのように書かれている。

一、原告等は、福岡県大牟田市原山町所在の三井鉱山株式会社三池鉱業所三川鉱に坑内夫として勤務していたが、昭和三十八年十一月九日午後三時十五分ごろ、三川鉱坑内において発生した炭じん爆発により被災し、以来「一酸化炭素中毒症」の傷病名のもと、今日なお療養中のものである。

二、ところが大牟田労働基準監督署長は、昭和四十一年十月二十六日付をもって労働者災害補償保険法による療養補償給付及び休業補償給付を同年十一月一日以降支給しないとの処分をなした。

そこで原告等は右処分に不服であったので、同法三十五条一項により福岡労働者災害補償保険審査官に対し同年十二月十二日付をもって、審査請求をしたところ、審査官は同四十二年十一月二十五日付をもって、右請求を棄却した。

よって原告等は、さらに右決定を争うため同四十三年一月二十四日、被告に対し同法三十五条一項により再審査請求に及んだ。ところが被告もまた原告桑原覚については同四十五年三月三十一日付をもって、原告川口時雄、同浦田譲二については同年五月二十日をもって、いずれも右再審査請求を棄却した。

三、被告は、再審査請求を棄却した理由として、原告等の傷病がすでに治ゆしたことをあげるのであるが、原告等はいまなお重い一酸化炭素中毒症の症病にあり、今後とも治療を継続すべき必要な状態にあるから、原告等がすでに治ゆしたとの前提にたつ被告の本件処分が違法なものであることは明白である。

よって被告の裁決の取消しを求めて本請求に及んだ。

まず守ることから

各地にCO守る会結成相次ぐ

各地でCO患者守る会の発足が続いているが、またこのほど、二つのCO患者守る会が誕生した。一つは近くの地でのことで、熊本労働金庫の全組合員を包括して、他は遠く兵庫県の加古川・高砂両市の有志が集まって、それぞれ「まず命と健康を守る闘いは三池のCO患者を守ることから…」と、守る会運動がはじまった。

美しい街づくりへ

加古川・高砂地区で

加古川・高砂地区CO中毒患者守る会は、六月十四日市内の一キリスト教会に有志が集まって、結成大会を開催し「生命と健康を守る闘いは三池から」「公害をなくそう―青い空、美しい街」「人間性をとりもどそう、職場・学園・地域から」と固く誓い、「三池のCO患者と遺族を合理化の犠牲をうけた〝生き証人〟として守り、各職場における労働災害と結合させ、生命と健康を守り、反合理化闘争を行ってゆく」（会則から）ことになった。

役員は会長をのぞき、次の人々である。（敬称略）

幹事
北山和夫、長谷川公英、畋平俊彦（以上加古川地区）、荒木真弓、岸野洋三、菊池明子（以上高砂地区）

他に会計＝村上富夫、事務局長＝菅野逸雄

事務局長となった菅野さんからわざわざ、次のように発会式当日の模様が知らせてきた。

菅野逸雄さんよりの便り

以前にも連絡致しましたが、六月十四日〝加古川・高砂地区CO中毒患者を守る会〟結成大会を開催、守る会が正式に発足しました。もっと早く結成大会をもつべきだったのに遅れてしまい、皆さんに申しわけなく思っています。

当日は〝神戸守る会〟や〝姫路CO守る会〟（現在準備中）にも参加をいただき、会員・オブザーなどあわせて、十六％の参加を得ました。

午後七時十五分よりアコーディオンの伴奏で、CO守る会のテーマソングにする予定の〝あたらしい太陽は昇る〟の歌唱指導をしながら、練習をしました。

開会宣言、あと僕が司会をさせてもらい、最初猪股牧師（曽根教会の牧師）より「若い青年に送る辞」として、「青年とは理想をもち、未来を求め、まさに人間として生きる事を追求し、ゼニ等にふり回されるのでなく、人間が人間として生きてゆくために闘ってゆくのが青年であり、また青年の課題である」という辞をうけました。

次に姫路CO守る会準備会の運尾さんより、「三池と人間」と題して「残るも地獄、去るも地獄といわれた三池における合理化攻撃が、三池闘争以後は全国的にかけられてきている。今、労働災害をなくし、公害をなくしてゆくためにも、三池のCO患者に対する同情の域を乗りこえて、自分たちの生命と健康を守るという意義を認識して、守る会運動を発展させ、闘ってゆかなければならない」との講演をうけました。

ちょうどそこへ神戸守る会の鍋島さんたちが「ある死者の日記」と題する録音テープ（朝日テレビで放映ずみ）をもってかけつけて下さいました。

次に長谷川さんより「全書・労災反対闘争と安保闘争を太いきずなで結びつけて闘えるとき、社会も変革されるだろう」という報告をうけました。

次に秋田泰輔さんより「公害には①産業公害、②交通公害、③政治公害の三つがあり、責任はすべて政府・独占資本にあり、微力ながらもCO守る会が一歩ずつ、一歩ずつ、それらの公害をなくす闘いに立ちあがってゆかなければならない」との報告をうけました。

そしてそのあとで規約を承認し全員拍手をもって役員を決定致しました。

最後に、事務局長を務めさせてもらうことになった僕があいさつをし、アピールを採択し、成功裡に結成大会を閉会しました。

我々の「生命と健康を守る」闘いがますます困難に、ますます苦しくなって行きそうな社会情勢ですが、ひるむことなく、「安保廃棄」「沖縄奪還」「働く者の社会構築」のため、共に頑張りましょう。

×

菅野さんのお住まいは「兵庫県加古川市尾上町今福六〇八」です。

組織をあげて加盟

熊本労金労組が

熊本労金CO患者守る会は、五月二十六日、三池労組から宮川組合長を招いて結成式をあげた。映画〝三池からの報告〟も鑑賞し、意義ある出発となったが、ここは労働組合の組織をあげての加盟で会員も約百二十人という大きな規模である。次の人々が役員となって、会の推進に当たることとなった。（以下敬称は略）

会長　黒田敏一
副会長　永田藤子
事務局長　新田利治
会計　島田重敏
他に運営委員＝山下邦夫、山崎操、蔵原政見、久保田武巳。

読書

実情と見方をつかむ

公害についての本

公害について知るためには、まずその実情をつかむことです。もっとも悲惨な公害である水俣病のことは、ジャーナリストのルポ首藤留夫『生ける人形の告発』（労働旬報社・四二〇円）と、患者の悲痛な叫びを伝えた石牟礼道子『苦海浄土―わが水俣病』（講談社・四六〇円）、富山県のイタイイタイ病については、医師の記録萩野昇『イタイイタイ病との闘い』（朝日新聞社・四二〇円）、小説化した新田次郎『神通川』（学研・四五〇円）などがありますが、ひるむことなく、「安保廃棄」「沖縄奪還」「働く者の社会構築」のため、共に頑張りましょう。

×

菅野さんのお住まいは「兵庫県加古川市尾上町今福六〇八」です。

怒りにわく沖縄

泣き寝入りはごめん

相次ぐ米軍犯罪にやむにやまれぬ抵抗

必死に抵抗したA子さん

「高校一年生、ひ弱い女の子ですよ。それがあの毛むくじゃらの米兵に、しがみついて抵抗しているんです。犯人のズボンやパンツにまで、ベットリついた血痕がその証拠。あれは距離をおいて浴びた返り血ではない。刺された傷口から、はらわたがとびだすまでの必死の抵抗……」沖縄中部の基地の町、美里中学校の山田朝良校長は、話しながら目をうるませた。

山田先生がふれた事件は五月三十日のまっ昼間、美里に近い具志川で起きた。前原高校二年生のA子さんが下校途中、自宅から四十メートルの地点で、後からつけてきた米兵に襲われ、砂糖きび畑にひっぱりこまれたが、激しく抵抗したため、米兵はナイフでA子さんの腹など三カ所を刺し、近くの米通信基地に逃げこんだ。

本土では六月一日の朝刊に「沖縄女子高校生刺傷事件」として、小さく報道されたにとどまったが現地沖縄では米兵の傍若無人な残虐行為と、犯人追及を怠る米軍当局に対する怒りが爆発し、全県あげての抗議行動へと発展した。それは同地区住民の抗議集会に始まり、前原高校教職員を中心にした抗議集会とデモ、米民政府ゲート前の座りこみ、高教組、PTA、教職員会、復帰協が立ち上がって県民抗議大会（二万二千人）となった。屋良主席の厳重抗議、立法院、各市、村議会の決議と続く中で、米側もついに犯人逮捕にふみきり、裁判の公開を約束せざるをえなくなった。

米兵の暴虐は許せない

琉球政府は米軍人・軍属の犯罪には、捜査も逮捕も裁判もする権利がない。「米軍は権利をかさに着て黒を白といい、犯人を裁くに甘く、婦女暴行などは、戦い疲れた兵士の無聊慰安行為として黙認しているんだ」と、沖縄の仲間が怒りをぶちまけるように、米軍人は勝手気ままにふるまい、数限りない被害者が泣き寝入りしてきた。

頼みは本土復帰だと耐えてきた沖縄県民にとって、昨秋の佐藤・ニクソン会談、日米共同声明は何と受けとめられただろうか。「佐藤、おまえもか」と、このときから「本土復帰」は、希望とあこがれから怒りと不安にかわり、自衛のための抵抗闘争が火を吹き始めたといえないだろうか。

基地撤去、米軍帰れ！

そして、六月にはいると、前原高校の組織的な抗議闘争と並行して、住民の自衛行動が連日、那覇市を中心にくりひろげられるようになった。おもなものを拾ってみると、「外人車のあて逃げを百数十人の住民がとり押える――十一日に二件」「米兵アパートへガス弾金の集金に行ったところ、払う金はないと短刀で脅迫、ききつけた近くの住民および百人がバットや角材をもって押しかけ、ビンやクサリをもって待ちうけていた米兵十数人と対立騒然――十三日。「翌日の夜、米兵アパート周辺の外人乗用車十四台が、タイヤの空気を全部何ものかに抜かれていた」などなど。

泣き寝入りはまっぴらだ。裁判権をよこせの要求から、基地撤去、アメリカ帰れ、侵略戦争やめよの要求に発展して、さらに七〇年代の決戦に向って、沖縄の仲間はたたかい続けている。（全国金属労組教宣部長・田所貞男）

【KNA】